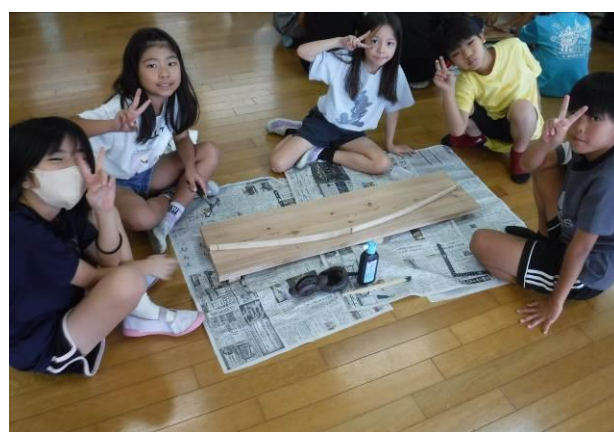


うるま市立海の文化資料館 企画展「船をつくる道具たち」

開催期間：2024年11月 2日（土）～2025年 1月31日（金）



【企画展の内容・目的】

- 「船大工の道具を通してみるこの地域の海」をテーマに、常設展示しているマールン船などの木造船を生かしながら、船大工の道具を展示し造船技術や船の素材の変遷などを紹介した。当館は、海中道路（沖縄本島と平安座島を結ぶ約5kmの道路）の中間地点に所在している。海中道路ができる前と後の歴史もまじえて展示することで、空間そのものを海洋教育の場となし、船と海のくらしに興味関心を引き出すことを目標に実施した。
- 廃材からオリジナルの船を作り出し実際に浮かべ走らせることで、素材ごとの船の浮き方や挙動を学び、企画展で紹介している船の作り方やそれに使われる素材などの内容をよりわかりやすいようにした。船と造船技術に興味を持たせる場として、地域で見られる船とその素材を紹介し、船大工が使う造船道具を実際に体験してみる講座を実施した。
- 郷土に残る歴史や文化、海が今よりも身近だった時のくらしへの関心向上を図る。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

1. 企画展示の内容

■開催期間：2024年11月 2日（土）～2025年 1月31日（金）

■開催場所：うるま市立海の文化資料館 企画展示室・常設展示の一部

■入場者数：11,521 人



海の文化資料館 外観



企画展会場 入口



第1章「船大工の道具」では展示場内ガラスケースに、船大工用具約200点を「叩く」「削る」「切る」「締める」「開ける」「測る」の用途ごとに展示した。唐錐と手動ドリルを並列することで、道具の移り変わりがわかるようになっている。また、木造船作業だけではなくFRP作業に使われるローラーやハサミなどの道具もこのコーナーで紹介した。

船大工の道具の中には大工道具にも使われるものも多いため、普段の生活の中で道具を見つけた際に、これは船大工の使う道具だと本企画展示を想起させる効果が生まれた。船大工が展示されている道具たちを使って作業を行っている写真を道具周辺に展示し、どのように使用するのか来館者がわかりやすいようにした。また、展示に使用した写真たちは常設展示しているマラン船やサバニ、琉球伝馬船を造船している時の様子であり、道具と作業中の写真展示を通して常設している木造船たちを鑑賞することで船の構造や造船技術へ興味関心を引き出すきっかけとなった。特に、マラン船のメンテナンス作業で行われたまきはだ打ち（杉などの樹皮を縄状にした目地材を外板の隙間に打つ作業）の写真は現在ではあまり見られなくなった風景であり貴重なものである。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。



第2章「色々な材質の船」では木材や鉄、FRP など船に利用される素材を紹介した。資料として造船時に利用される鉄杉（丸太）や鉄船、FRP 船などの写真を展示し、自分たちが普段見ている船の素材が何にあたるのか学べるようにした。体験できるものとして船大工が実際に利用する平釘やまきはだ、FRP（ロービング、ガラスマット、硬化状態のもの）に触れるコーナーを設けた。触ることで、船の素材がどんなものでできているのか体感でき、平釘はどのように利用されるのか、FRP を貼る際はどの道具が使われるのかなど第1章に展示していた船大工の道具と関連して学べる。第3章「木造船の道」では、丸木舟や渡船の模型を展示することで、変化していく船の歴史をわかりやすいよう工夫した。丸木舟と構造船を間近で見比べられるため、造船技術や船の構造上の変化が理解しやすくなっている。ガラスケースには石斧と貝斧、現在越來造船で使用されている道具も展示しているため、昔から形状を変えずに使用されている道具と変化した道具とを比較して鑑賞でき、時代ごとの道具と船を関連付けて学べる。



第4章の「海中道路」では、当館に常設している与勝半島周辺のジオラマ（約1/6100縮尺）と海中道路建設の歴史がわかる動画を上映しつつ、建設中の写真や海上の状況により本島と離島を行き来する方法が変化する島民たちの写真などを展示した。本事業で製作した解説パネルには、海中道路ができるまでの年代と出来事、建設に参加する島民の写真、おおまかな流れを掲載した。本解説パネルは今後も常設展示などで活用していきたい。海中道路周辺は広大な干潟があるため、道路ができる以前の干潮時には徒歩や海上トラックで本島と離島を行き来していた歴史がある。当時のくらしを解説することで、島しょ地域の離島苦の様子が来館者へ伝わりやすいようにし、海中道路の中間地点にある当館そのものが文化的教材となる効果も生んだ。市内小学校の団体見学者へは館内見学用ワークシートを配布することで船大工道具から船の素材、丸木舟から汽船、船たちが身近で活躍していたくらしという企画展示の流れが把握しやすく子どもたちにも企画展示の内容が伝わる効果があった。



おわりのコーナーでは、1958年から1959年の間アメリカ海兵隊員として沖縄県に滞在していた Richaed Bruce 氏が撮影した写真の中から、サバニや渡船が写っている資料9点を展示した。渡船を待つ島民の様子や海岸に陸揚げされているサバニなど木造船が身近にあったころの写真資料をみながら、当時と今で変化した地域のようすを見比べられる展示を行った。海中道路ができたことで渡船から車へと移動手段が変化するなか、船大工の道具はどうなっているのか。手動ドリルから電動ドライバーへ変化した道具もあれば、墨壺やのみなど昔から大して変化していない道具もある。変わりゆくものと変わらないものを海が身近なくらしと船大工の道具を通して感じられるような展示コーナーになるよう意識した。アンケートコーナーの隣に本企画展の図録を平置きし、興味を持った来館者が図録を持ち帰りやすいようにした。図録には船大工道具の一覧が掲載されているため子どもたちも手に取りやすくなっている。

【来館者の声】

○豊富な資料、写真、実物の展示が一度に鑑賞できたのが良かった。海の文化は多様性があり陸の文化とも密接に関わっていて面白いと感じました。木造船の技術が失われないでほしいと強く思いました。

○船作りの道具を間近で見たのは初めてだったので、どの工程の道具も興味深かったです。太古から人は船で海に出て交流をしていました。その営みを伝える展示は大切にしたいと思いました。

○常設している船長室や木造船に触れたのが嬉しかったです。沖縄の海上で活躍していた木造船を身近に感じられました。

○離島苦から解放されるために海中道路をつくったけれどそれにより失われた風景があることは残念に思いました。人の便利な生活と環境とのバランスの取り方を考えさせられました。

2. 関連事業の内容

■なにかで船をつくってみよう！

【開催日時】2024年12月14日（土） 9:00～16:30

【開催場所】うるま市立海の文化資料館 ロビー・会議室

【参加者数】18人

【実施内容・目的】

- 紙パックなどの素材を利用してオリジナルの船をつくり、実際に水に浮かべて走らせた。素材による船の浮き方や船型の違いによる挙動を体験することで船の仕組みをわかりやすく伝える。
- 企画展で紹介しているジュラルミン製の舟は戦後物資の乏しいなか生み出された船であるという内容とリンクさせ、廃材から船を作り出すという疑似体験をする。



開催場所の全景の様子



素材選びの様子



牛乳パックやトレイ、発泡スチロール、木材など水に強い廃材の中から素材を1つ選び船をつくる。自分たちが使っているカッターなどの道具が船大工の道具だとどれにあたるのかをつくりながら解説することで、自分たちがプチ船大工になったように感じながら船大工の道具も学べる。また、動力を風力、モーター、ゴムプロペラ、水力の中から選ばせてどの動力だとより速く船が走るのか試せるようにした。実際の船はどんな動力を使って動かしているのか興味関心を引き出すきっかけとなった。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。



実際に船を浮かべてどのように浮かび、走るのかを試してみる。ある程度走らせることができたなら、次は船のバランスをみながら積み荷を載せて、積み荷を載せた時と載せない時でタイムに差は出るのか検証してみる。選んだ素材による浮かび方や進み方の違いを知り、早く走らせるための創意工夫を生んだ。船の形によっても特徴がある事を学び、生活の中で見かける船や当館に展示しているマールン船、サバニなどの木造船に興味を持つきっかけを与えた。



自分の作った船はどの程度の荷物が載せられて、どれくらいの速さで進むのか検証できたらシップカードに船の写真、名前やタイム、荷物の点数を記入して掲示する。シップカードに記入することで自分の船の特徴を把握しやすくなるとともに他の参加者との情報共有がスムーズに行える。また各自作った船の写真が掲示されるため、どの形の船が速いタイムが出るのか荷物がたくさん載せられるのかがわかりやすくなる。船の素材や形を考えることで、船自体に興味関心を引き出す機会となった。また、限られた素材の中から船をつくりだしていた先人たちの創意工夫も身近に感じられる講座となった。

【参加者の声】

- 船を作れておもしろかったです。船は海があつてのものなんだと改めて学びました。
- 船を作ってタイムや重りの数で勝負したのが良かったです。帆をはる位置で進み方が違って学びになりました。
- みんなで船の作り方を工夫したり、荷物を多く運ぶにはどうしたらいいか考えたりしました。海に浮かぶ船をつくる時も同じように考えられて造っているんだと今回の講座から学びました。
- 今あるもの（廃材）から新しいものを生み出すことは、SDGs 中にある「海の豊かさを守ろう」や「つくる責任つかう責任」につながるなと感じました。

■造船道具を体験しよう！

【開催日時】 2024年12月 6日（金）10:30～12:10

【開催場所】 うるま市立与那城小学校

【参加者数】 91人

【実施内容・目的】

- 企画展「船をつくる道具たち」で解説している船の素材の変化や丸木舟やマールン船などの木造船、木造船が活躍していた時代を学ぶことで、船が身近だった海のくらしを考えるきっかけを与える。
- うるま市与那城地域の歴史を学びながら、船大工が実際に使用する道具を体験することでうるま市に残る造船技術を知り海のくらしと船を身近に感じさせるきっかけを与える。



開催場所の全景の様子



解説中の様子



うるま市立与那城小学校の3年生を対象に、海中道路ができる前はどのような方法で本島と離島を行き来していたのか、うるま市与那城地域ではどのような素材の船たちがみられるのか、船の素材が木材からFRPへと変化した流れ、木造船の種類を紹介した。海上交通が盛んだった頃の様子を学びながら船の素材に使われている木材、アルミ（ジュラルミン）（今回はジュラルミン製のやかんを代用）、FRPに触れることで船そのものに興味を持つきっかけを与えた。また、素材のメリット・デメリットを知ることによって便利な暮らしと海の自然環境のバランスについて考える場となった。



児童を15グループにわけ、造船時に利用される墨壺、墨差し、指矩、定規の道具を使って船の形を描く造船道具体験を行った。越来造船の船大工である越来勇喜氏をボランティア講師として招聘し子どもたちへ造船道具の使い方や左右対称に曲線を引く方法などをレクチャーしていただいた。地域に残る造船技術とその保持者を知ること、マールン船やサバニなどの木造船を身近に感じられるとともに、自分たちが体験している墨壺をはじめとする道具たちは造船に利用される道具であるというイメージの定着化につながった。



各グループでどんな船のかたちにしたいか話し合い、造船時に利用される素材である飫肥杉に、墨壺と墨差し、定規を使いかたちを描いていった。船大工が実際に行っている作業を同じ道具を使って体験することで船と造船技術に興味を持つきっかけとなった。質疑応答の時間に、船大工の仕事内容や給料について船大工自身から答えてもらうことで木造船の現状を知り次の世代に残すにはどうしたらよいのか考える場となった。また、木造船が活躍していた時代を想像することで、地域の歴史や海が身近だったくらしを改めて調べてみようとする活動にもつながった。

【参加者の声】

- 船大工が実際に使っている道具と技術を使って、船の形を板に描けたのが楽しかったです。この道具たちを使って、マールン船やサバニが造られて海に浮かんでいると思うと海と人の間にはいろんな歴史があるんだと感じました。
- 様々な素材でできた船を学びましたが、なかでも木でできた木造船は自然に還りやすいので海にとって優しい素材なんだと感じました。
- 海中道路がない頃は、本島と離島を徒歩や渡船を利用して行き来していたことを学びました。海の状態によって毎日移動手段が変化するのは大変だと感じました。

■海中道路ができるまでとその後

【開催日時】2024年 1月25日（土）14:00～16:30

【開催場所】うるま市立海の文化資料館 ロビー

【参加者数】58人

【実施内容・目的】

- 昨年制作された紙芝居『夢の海中道路』の読み聞かせを、紙芝居サークル「夢の橋」が行った。海中道路ができる前と後で変化した島しょ地域のくらしや海中道路建設の様子を子どもたちにわかりやすく伝えることで、地域の歴史や渡し船に興味を持つきっかけとなる。
- 渡し船が交通の要として利用されていたことや広大な干潟を持つ環境であることを学び、海中道路を文化的景観としての面を示した。



開催場所の全景の様子



読み合わせの様子



昨年制作された紙芝居『夢の海中道路』の読み聞かせを紙芝居サークル「夢の橋」が行った。読み聞かせという手法を取ることで、親子で海中道路の歴史について同じ目線で学ぶことができるため意見交換がしやすく、地域について調べてみようというきっかけが生まれた。紙芝居で海中道路に興味を持った子どもたちが館内を見学することで作中に出てきた渡し船はどんなかたちだったのか、どのような方法で島同士を行き来していたのかをより具体的に学習できる流れが生まれた。



海中道路ができるまでを紙芝居で学んだあとに、地域の方から平安座島の住民だけで道路をつくろうとしたときの様子や干潟を利用して徒歩で島同士を行き来していたときのようす、海中道路が完成してから変化した島民のくらしの様子などを語っていただいた。地域の方から実体験を語ってもらうことで、子どもたちが地域の歴史を身近に感じ興味を持つ機会となった。また、紙芝居では語れなかった部分を地域の方が語ることで、海中道路ができたことで島民の移動手段は楽になったが、渡し船が減ることで木造船が衰退した部分について考えるきっかけにもなった。



海中道路は景観の美しい観光地としての面がクローズアップされることの多い場所である。紙芝居で海中道路ができるまでを学んだのちにこの景観を望むと、海中道路ができる前は渡し船が交通の要として利用されていたことや広大な干潟を利用して徒歩で島同士を行き来していた様子などが想像しやすくなり、文化的景観として活用できるきっかけとなった。また、海中道路周辺の自然環境へも興味を持ち、干潟にすむツノメガニなどの生き物や現在と過去で変化した干潟のようす、干潟を利用した漁業と島民に伝わる伝統的な漁を調べてみようとする動きを生んだ。

【参加者の声】

- 海中道路の紙芝居の中に、徒歩で移動したというお話がありました。広大な干潟があったから徒歩で島から本島への移動ができたのだと学びました。
- 海中道路ができる以前は渡船が移動手段。海難事故にあった話を聞くと移動するだけで命がけだったのだと知りました。
- 当時を知る島民の方から直接お話が聞けてとても良かったです。海が身近なゆえの苦労とくらしがあったことを学びました。

【事業全体のまとめ】

「船大工の道具を通してみるこの地域の海」をテーマに企画展と付帯事業を行った。展示では船大工の道具、船の素材や木造船から FRP 船へ移行する様子、海中道路ができるまでの流れを展示し付帯事業では、廃材から船づくりを行う体験や造船道具の体験、海中道路の紙芝居を開催した。来館者からは豊富な資料と実物の展示、船長室などの触れる展示物があり展示内容が理解しやすいとの意見が多くあった。海といえば生き物への興味が高かった来館者たちから、「展示を通し海の周辺の人々のくらしや海と人との関係性に目を向けることができた」「海洋へ出る船を造り支える船大工の技術の高さを学べた」と感想があったことからうるま市の海のかくらしや地域に残る造船技術、海中道路の歴史など当館でしか得られない「海の学び」ができたのではないかと考える。また、市内小学生を中心に開催した付帯事業では、「実際の船もバランスや速さが考えられて造られていることを知った」、「船大工が実際に使用している道具を同じ用途で使用できて楽しかった」などの感想も寄せられたため、船と海のかくらしへ興味関心を引き出すきっかけになったのではないかと考えられる。

3. 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 合資会社 越来造船	企画展「船をつくる道具たち」において資料の借用、船大工目線の助言をいただいた。付帯事業「なにかで船をつくってみよう!」、「造船道具を体験しよう!」の際にはボランティア講師として当市の無形民俗文化財の普及、造船技術を支える道具について当事者の目線から子どもたちへ解説していただいた。
2. うるま市立与那城小学校	与那城小学校 3 年生を対象に付帯事業「造船道具を体験しよう!」を実施した。
3. 紙芝居サークル「夢の橋」	付帯事業「海中道路ができるまでとその後」において紙芝居『夢の海中道路』の朗読やうるま市地域出身者から海中道路ができる前の離島苦とできてからの利便性を語っていただいた。

4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 琉球放送 [RBC News Link]	うるま市で企画展 船をつくる道具たち 2024 年 11 月 21 日
2. NHK 沖縄放送局 [おきなわ HOT eye]	イベント情報 船をつくる道具たち 2024 年 12 月 6 日
3. 琉球新報	船大工道具 変遷学ぶ、2024 年 12 月 29 日
4. 沖縄タイムス	海の駅あやはし 造船道具を展示 2025 年 1 月 7 日

以 上